

再会誌学の目指すもの

——アメリカ先住民ホピとの協働が拓く博物館資料の新たな可能性

2026年 10月9日(金) 18:30～20:00

■ 講演の概要

世界各地の民族誌博物館では、資料が由来する社会や文化との関係を見直し、ソースコミュニティと協働する取り組みが進められています。その一環として、ソースコミュニティの人びとによる資料熟覧の機会も増えています。博物館では「もの」を、来歴や用途、物質的特徴などに基づいて記録します。一方、熟覧の場では、それまで記録されてこなかった制作者の意図や技術、個人の経験、家族の歴史、共同体の記憶などが語られました。その結果、「もの」は単なる学術資料ではなく、個人や家族や共同体の記憶と経験が重なり合う「自分たちの歩んできた歴史の証し」であり、未来の世代に知識や経験を伝える媒介として捉え直されます。「もの」の生産・流通・消費に続くこの「再会」の過程は、博物館資料が現代においてもなお文化継承やアイデンティティ形成、次世代育成に重要な役割を果たしていることを示しています。本講演会では、再会プロジェクトを10年以上続け、資料熟覧の現場で語られた「もの語り」をデジタル映像アーカイブや資料集としてまとめてきた研究者と、アメリカ先住民ホピの銀細工師が対話し、博物館資料との「再会」がもつ多様な意義を語り合います。

■ 講演者プロフィール

ジェロ・ロマベンティマ (Gerald Lomaventema)



(Steven Meckler撮影)



(伊藤敦規撮影)

アメリカ先住民ホピの銀細工師・銀細工技術教育者・ギャラリー経営者。ホピ保留地第二メサのソングーパヴィ村落出身、熊クラン成員。ホピ銀細工師ギルドで学んだ最後の世代であり、重ね合わせ(オーバーレイ)技法に加え、象嵌技法や石灰岩型鑄造技法などを組み合わせた作品制作を得意とする。地元でトウモロコシ畑の世話や雨乞い儀礼に携わりながら、各地のアートショーで作品を発表している。2014年から国立民族学博物館の伊藤敦規氏が主催する「再会プロジェクト」に中心的に参加し、世界各地の博物館が所蔵するホピ製資料の熟覧を重ねてきた。2015年からは自ら助成金を獲得してホピの若手銀細工師の育成に取り組み、資料熟覧に若手作家を帯同して自分たちの歴史を学ぶ機会をつくるとともに、古い資料を手がかりとして銀貨鑄塊技法や鑿打ち技法の再興に尽力している。2026年10月11日、12日に民族共生象徴空間(ウポポイ)で開催される「アイヌアートショー2026」に参加予定。

デルウィン・スパイダー・タウヴァヤ (Delwyn Spyder Tawvaya)



(Steven Meckler撮影)



(伊藤敦規撮影)

アメリカ先住民ホピの銀細工師・銀細工技術教育者。ホピ保留地第二メサのソングーパヴィ村落出身、雪クラン成員。高校時代から絵画やデザインなどのアート分野で高い能力を発揮してきたが、2016年にジェロ・ロマベンティマ氏の銀細工教室で学びはじめ、現在はプロの銀細工師として活動している。銀板に独特なデザインを起こし、それを手作業で精緻に切り抜く高度な技術で知られ、アートショーでは最優秀作品賞の受賞経験もある。2017年にジェロ氏の生徒として「再会プロジェクト」に参加し、デンバー美術館などが所蔵するホピ製銀細工資料の熟覧を行った。2026年からは自身の経験をもとに若手銀細工師の育成にも取り組み、博物館資料の熟覧を技術指導カリキュラムに取り入れている。2026年10月11日、12日に民族共生象徴空間(ウポポイ)で開催される「アイヌアートショー2026」に参加予定。

伊藤敦規 (Atsunori ITO)



国立民族学博物館准教授／北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員研究員。札幌市真駒内出身。社会人類学博士(東京都立大学)。専門は博物館人類学。2003年に初めてホピ保留地を訪れ、2007年から5年間にわたりホピの人々を日本に招聘してアートショーを主催した。2014年から現在まで科研費等の助成を受けて「再会プロジェクト」を主宰し、ホピの人々とともに世界20機関約3400点のホピ製資料の熟覧調査を進めてきた。現在はその記録をデジタル映像アーカイブや資料集としてまとめるとともに、博物館資料とソースコミュニティとの「再会」を通して生まれる記憶や知識、経験の共有と継承を記録・分析する新たな研究方法「再会誌学(Reconnectography)」の理論化を進めている。また、日本文化人類学会の倫理委員会委員、アイヌ民族研究特別委員会委員として、学会とアイヌ民族との関係史の検証にも携わる。2022年にはじまったウポポイでのアイヌアートショーの創設と運営にも参加している。